

再発見・牛久第十六話

牛久市文化財保護審議委員

栗原 功くりはら いさお

小川(芋銭)家系譜⑨

佐々木・木村・小川

芋銭先生景慕の詩

—高村光太郎作—

彫刻家高村光太郎は、一般的には彫刻家としてよりも詩人としての知名度が高く、『智恵子抄』は詩集の一つでよく読まれている。

高村光太郎夫人の智恵子の姪のはる子は取手町(現取手市)の宮崎仁十郎の長男稔の夫人であった。昭和13年(1938年)12月に小川芋銭が没すると、芋銭と親交の深かった仁十郎はその死をいたく悲しみ光太郎に芋銭の詩を依頼した。翌年3月、光太郎から仁十郎に、『芋銭先生景慕の詩』の原稿が送られてきた。(こ)までは昭和45年9月発行の取手町郷土史資料集(第二集)の詩人高村光太郎と取手の段より)。

宮崎仁十郎は、明治5年(1872年)に取手村の農家に生まれ、25歳で町会議員選挙に当選

し、のちに北相馬郡会議員に推されてい

宮崎は、大正2年(1913年)に利根川架橋を決心し、本県出身および選出の貴族院議員と衆議院議員に「利根川架橋の必要性」を説いて回った。宮崎と水魚の交わりがあつた芋銭は、貴族院議員徳富蘇峰(蘆花の兄)や憲政の神様と称される衆議院議員尾崎行雄に「利根川架橋」を依頼して歩いた。二人の情熱によって利根川架橋が実現することになり、昭和3年(1928年)9月に架橋大工事の起工式が行われた。下に「芋銭先生景慕の詩」の全文を掲載しておく。



小川芋銭先生景慕之碑「小川芋銭先生景慕之碑」の揮毫は高村光太郎。所在地取手市本町(現2丁目)長禅寺境内。

芋銭先生景慕の詩

高村光太郎

悩まざるものあらんや。
窮迫せざるものあらんや。
若くして一つの道に憑かれた魂の
正しきに順ふもの、
みな殆ど餓ゑんとす。
文明開化の都會にもまれて瘦せて弱く、
土なつかしい芋をわづかに喰らつて
一枚十銭の小間繪をかいた。
それが先生。

芋銭先生は犬の多い都會をすてた。
東籬の菊はさもあらばあれ、
草深い牛久の里に鎌をもち
農家の婦に半生を支へられ
「恍惚として自然を見」
手に麻三斤のさとりを得た。
何がおのれの生活であり
何がおのれの性来であるか。
それは河童が教へてくれた。

芋銭先生は歴遊する。
先生をめぐつて天地の密意はあつまる。
霞む水には蜃氣樓。
岩うつ波には大龍巻。
さうして畦をとぼとぼ歸る
村の老農童子おかみさん、
あたたかくやさしくきよく、
物に向つて物思ふ筆のあはれ深く、
しんじつに見る、
しんじつにゑがく、
是れ一か是れ二か。
先生は大觀にもらつた青墨をよるこび
しづかにかろくそれを磨る。
膠の枯れた雲煙が乾坤に立ちこめる。

芋銭先生が龍に乗るのは
右軍過庭と遊ぶ時だ。
窺ひがたい贅力であり
又放たれた造型である。
しんしんとして律令あり、
しかも一切を脱却して非情に入る。
無何有の郷無からざらんや、
先生六極の外に風を繫ぐ。

水草しげる牛久の里に河童すみ、
もとより河童は出没時なく
喜怒哀樂に際涯なく、
背中の甲羅で世情をうけとめ
頭のお皿に命の水をたつぶり湛へ
酒買ひにゆき
村の娘にからかはれ、
或は鍬のやうにすまじく
或は愚かのやうにのどかである。

芋銭先生が河童にもらつた尻子玉は
世にもおいしい里芋となり、
里芋光を放つて變貌すれば
まことに觀世音菩薩におはす。
先生菩薩なるか河童なるか。
そもそも芋をくらひて幽玄の味に徹する
是れ野人なるか真人なるか。
願はくは大休老師の一轉語を得て
わたくしも亦眼をひらかう。
春の雨草をぬらし
牛久の草汁庵に先生亡し。
景慕は酸のやうに心にしみ
言葉はただ遠く先生を迂回する。

※出典 筑摩書房『高村光太郎全集第二卷』より